

地理学の研究テーマを巡る

—修士論文のテーマを求めて—

南 和樹

キーワード：立地，交通，地域，学習内容，教育，学校

地理学の研究テーマをいくつか考えてみた。17のテーマごとに6つのキーワードを並べて表1を作成し、図1と図2のようにまとめた。本稿の作成にあたり、先行研究や研究分野の内容を今以上に学習する必要があることを改めて感じた。問題の所在と課題をよく把握して、修士論文を作成する。

1. 兵庫県北播磨地域の飲食店の立地と選好—交通網と空間的行動の分析—

筆者の卒業研究は「兵庫県北播磨地域の飲食店と学生の動向」というテーマであった。大学院ではこのテーマを前提として、学部の卒業研究でできなかったことを研究する。とくに、地域の交通網や交通条件から人々の空間的行動について調査する。

私たちが空間的に行動するとき、その範囲は認識されている範囲に限られる。人間の空間的行動において、意思決定過程は情報が入ってきてから、認知→選好→態度形成→選択→行動の順番で進むからである。認知されなければ、意思決定、行動には至らない。

飲食店の選好も同様である。調査に当たり、対象者のよく行く飲食店を順番に列挙してもらい、周辺の手描き地図を併せて記入してもらおう。手描き地図は、その人の空間的認知が如実にあらわれるものであり、手描き地図＝その人の地域に対する認知といえる。手描き地図には、飲食店に関してだけでなく、買い物や遊びなど地域間を移動する頻度やその地域で暮らしている経年時間によって記入量に差が生じると予想される。

ネットワークとはノード(点)とリンク(線)によって形成されるもので、交通網もネットワークである。GISソフトを用いて、地域の交通網や交通条件から人々の空間的行動について調査し、手描き地図から空間的認知の範囲を検討し、両者の関連性を考察する。また、時空間プリズムの分析により、行動範囲を表出して、手描き地図にかき出されたランドマークとの関係を考察する。

修士課程修了後に小学校教員になって、社会科の地域教材に本研究を活かし、子どもたちの身近な地域を教えられるようにまとめる。

2. 大学生の自動車の利用動向

兵庫教育大学の学生を対象に、自動車利用の経年的推移と現状および課題を考察する。兵庫教育大学が立地する加東市は北播磨地域にあり、交通手段が少なく、公共交通網も希薄で、地域内および地域間の移動が困難である。そのため、学生のほとんどが原動機付き自転車や自動車など何らかの移動手段を自前で持っている。そこで、学生に対して、なぜその移動手段、乗り物を選択したのか聞き取り調査をする。学生が所持している車の大半が軽自動車である。維持費、燃料費が普通自動車に比べると安価であるからだと考えられる。また、普段の生活での行動範囲や1週間にどのくらいの頻度で利用するかなど、利用動向を調べて、学生の生活圏を考察する。

3. 小中一貫教育における社会科の内容構成

近年、小中一貫教育、中高一貫教育などが盛んに取り沙汰されている。兵庫教育大学がある加東市でも2021（平成33）年度から、小中一貫教育へと全面的に改変されるようである。兵庫県では市全体として小中一貫教育に移行するのは加東市が初の取組である。この施策の理由はいくつか考えられるが、加東市の場合はおもに子どもたちの減少に原因があり、統廃合による教員の人員削減のためだと考えられる。

従来の9年間を通じた義務教育の学習課程では、小学校1、2年生のときには生活科を、3～6年生のときに社会科を学習する。小学校の社会科は3～5年生まではおもに地域学習（地理的内容）であり、6年生のときに日本の歴史と公民的内容を学習する。中学校では1、2年生のときに日本の歴史と地理、3年生では日本の歴史の残りと公民を学習する。小学校、中学校、高等学校と、垂直的な連携が図られていることにより徐々に深い内容を学習する仕組みになっている。

しかしである。小学校、中学校の社会科において内容的に同じことを反復して学習するため、筆者自身あまりよいとは思わない。従来の小学校社会科の5、6年生で学習する内容は、中学校で学習する内容の重要な部分だけで、詳細まで学習することは少ない。小学校、中学校と、同じ内容を学習することは同じことの繰り返しで、無駄のように思う。私自身が小学校の児童、中学校の生徒の時代に疑問に思っていたことである。

小中一貫教育を前提とすると、小学校5年生から中学校3年生までにかけての社会科の授業を5年間通して設計することにより、今まで以上の学習効果を得られるのではないかと思う。小中一貫教育が学力の向上につながるか考察する。

加東市に隣接する小野市立河合小学校、中学校では2015（平成27）年度から小中一貫教育が試験的に始まっている。両校は隣接しているので小中一貫に移行しやすかったからである。そこでは5・4制がとられ、現在の6年生は中学校の校舎で勉強している。しかし、学年の区切り方次第ではあるが、5・4制だと、小学校6年生で身につけてほしいリーダーシップが子どもたちに身につくのかなど疑問点もある。小中一貫教育への移行に伴い、兵庫教育大学の学長、加治佐哲也氏は現小学校と中学校の教員は両方の免許をもつようにしなければならないことから、大学の教員養成課程を変更する必要があると主張している。

4. 小学校の統廃合と小中一貫教育

兵庫教育大学がある加東市では、2021（平成33）年度から市内の公立小学校を3校にまとめ、小中一貫教育へと移行する。加東市の社地区、滝野地区、東条地区にある小学校を各地区ごとに一つずつの小学校にまとめ、小中一貫教育を行うことになっている。兵庫県では、市全体で小中一貫教育になるのは加東市が初めてであり、様々な試みがなされる予定である。この施策により、現在市内に12校ある小学校を3校にまとめることができ、予算の削減にもなる。

スクールバスを設けて子どもたちを送迎することで、通学距離が長くなる子どもたちもカバーすることができる。加東市には現在コミュニティバスがないため、スクールバスを子どもたちの通学の時間はスクールバスとして、それ以外の時間はコミュニティバスとして兼用することができれば、この地域の交通の不便なところを少しでも改善できると考えられる。

しかし、地域の小学校がなくなってしまうと、そこに住んでいる人々の関係が希薄化してしまう恐れがあるため、反対意見も出ている。小学校という建物施設は地域のコミュニケーションを作り出す場にもなる。少子高齢化が進んでいるこの地域では、小学校の統廃合と小中一貫教育は妥当であるという考え方と、そうではないという反対派に分かれている。

文部科学省「平成 24 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、中学生の問題行動の件数が小学生に比べると何倍にもなっている。小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指し、義務教育 9 年間を通じて児童生徒の発達に合わせた教育課程を実現するため、小中一貫教育に関する教育課程の基準の特例、小中連携コーディネーターや小中連携・一貫教育の取組事例集の活用等を図りながら、各学校や市町村における小中一貫教育の取組が求められる。これからの時代は、小中一貫教育が主流になると予想されるため、中 1 ギャップといった児童生徒に関する問題だけでなく、統廃合によって地域社会が直面する問題の解決につながる方策を考察する。

5. 附属小学校・中学校の通学パターンの変遷

兵庫教育大学の附属小学校・中学校の児童生徒を対象に、通学範囲を経年調査する。附属小学校・中学校の児童生徒は加東市内からだけでなく、近隣の市町からも通っているため、通学方法は様々であり、歩いてくる子もいれば、公共交通機関を使っている子もいる。附属小学校・中学校の開校時からの通学パターンを追跡するとともに、附属に通う児童生徒の居住地域と通学方法について考察する。

6. 附属小学校・中学校の通学行動の分析

兵庫教育大学の附属小学校・中学校の児童生徒を対象に、特定年度の通学行動を詳しく分析する。徒歩で通学する児童生徒もいれば、バスなどの公共交通機関を使う児童生徒もいる。また、児童生徒の保護者が送り迎え、あるいは送りだけをしていることもある。附属小中学校は公立の小中学校とは別扱いではあるが、その経験や立地特性が小中一貫教育を展望するヒントになりはしないだろうか。附属に通う児童生徒の居住地域と通学行動を調べることにより、小中一貫教育に可能な校区を考察することができるのではないかと考えられる。

7. 子どもの通学行動と帰宅後の遊び場の選択

学校に通う子どもたちの多くが徒歩で登下校している。子どもの家と学校との間には多くの民家や公園、店舗など様々な建物施設が並んでいる。子どもたちは帰宅後に近所の公園で遊んでいるのか、それとも、学校で遊んでいるのか、子どもたちの多くがいろいろな場所で遊んでいる。子どもたちの遊び場を調査することにより、子どもがどのような遊びをしているのか、また、どんな年代の子どもと遊んでいるのか研究することができる。また、子どもたちを事件や事故などの危険から守るための地域的取組を検討するためにも、小学生の通学路と学校外での外遊びの様子を追跡する。

8. 兵庫県の学校の立地変動

兵庫県には現在、小学校、中学校、高等学校、大学、専門学校、専修学校など、多くの種類の学校が存在する。1872（明治 5）年の学制発布により全国に学校区が作られ、学校が建設された。学校区は学校の成立関ともいえ、その地域の人口を反映している。地域の中に学校があり、地域と学校は切り離すことができない。明治初期から現在まで、多くの学校が作られては廃止されている。兵庫県における 150 年間に及ぶ学校の立地の移り変わりを考察する。また、地域の居住人口と比較したり、人口変動を推測することもできる。

地域における学校の立地や、各校種の学校数を時代を追って検討することにより、学齢ごとの児童生徒数、地域の人口の変動、必要とされる学校の数を考察することができる。また、これからの時代は小中一貫、中高一貫といったものが進むと予想されるため、これまでの学校の立地が大きく変化すると考えられる。学校区の中で、どのような位置に学校

が設置されるのか、過去から現在までの実態をもとに考察する。

9. 兵庫県の学校の立地動向

兵庫県には 1995(平成 7)年の阪神淡路大震災の原因となった野島断層や、これから起こると予想されている大きな地震のもとになる山崎断層などがあり、地震による災害が懸念される。兵庫県内には、これまで災害による被害に遭った校舎があり、災害によって場所を変更した学校もある。被害状況を調べるとともに、学校の建っている場所が地理的に安全なところかどうか、学校の立地は防災面から適切かどうか考察する。

10. 学校と地域の連携・協働—チーム学校の課題—

学校の周りには地域があり、地域の中に学校があるともいえる。地域には老若男女さまざまな人が住んでいる。その中で、子どもたちの登下校の際に年配の方々が見守りをしているのをよく見かける。学校は地域の助けがあるからこそ成り立っている。学校と地域の連携・協働の実態を調査する。

11. 教員の養成・採用・研修を通じた資質能力の向上—教職大学院の蹉跌は活かせるか—

大学の教員養成課程を経て教員になる場合、卒業後直に正規採用として働く、非正規採用(臨時採用、謂る臨採)として働く、そして、大学院に進学して 2 年間多く学んでから教員になる場合の 3 通りがある。正規採用の場合は初任者研修、3 年目研修などの研修機会や、各自自治体ごとの研修がある。非正規採用の場合も自治体の研修がある。

兵庫教育大学大学院では通常の修士課程(学校教育研究科)のほか、専門職学位課程(教育実践高度化専攻)が教職大学院として併設されている。教職大学院は、教員養成教育の改善・充実を図るべく高度専門職業人養成としての教員養成に特化した専門職大学院として創設された。近年の社会の大きな変動の中、様々な専門的職種や領域において、大学院段階で養成されるより高度な専門的職業能力を備えた人材が求められていることを背景としている。教員養成の分野についても、子どもたちの学ぶ意欲の低下や、社会意識・自立心の低下、社会性の不足、いじめや不登校などの深刻な状況など学校教育の抱える課題が複雑・多様化する中で、こうした変化や諸課題に対応しうる高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が求められているというのがお題目である。

ところが、実際の教職大学院の在学学生には現職教員のほか、大学を卒業して直接大学院に進学した謂るストレートの学生も多い。後者にとっては高度専門職業人も何もない。なにせ、まだ職業に就いたことがないのだから、それをどうして高度化できようか。ストレート学生に現職教員と同じ教育課程を課しているということのほか、教職大学院のカリキュラム自体についても問題が多い。教員養成の大学院として、教職大学院は失敗モデルと言わざるをえない。また、教員養成課程が 4 年から 6 年になるという噂があったが、もし、本当に 6 年制になった場合は教職大学院の意味はどうなるのだろうか。

最近、教員の養成・採用・研修の各段階の連携・協働が話題になっている。そのため、小学校、中学校、高等学校それぞれの校種から派遣されている現職教員の数を調査する。それと、ストレート学生の志望する校種の割合をそれぞれ比較する。他大学の大学院のカリキュラムと比較検討もしながら、大学院における教員の養成や資質向上に必要なものは何か考察する。

12. 兵庫県の空き家の現状と課題

2015(平成 27)年 2 月 26 日より空家等対策特別措置法が施行された。この法律は、更地の 6 分の 1 だった固定資産税の税率が更地と同等になり、空き家を持つ人は従来の 6 倍

の税負担を背負わされる恐れがあるという新法である。2014(平成26)年7月に公表された総務省の統計では、全国に存在する空き家は820万戸を超える。その中には、所有者や管理者が不明である、いわゆる廃屋になって倒壊の恐れがある、あるいはホームレスの溜り場になっていたりする住宅も少なくない。そのような危険な空き家を減らすことを目的としてこの空家等対策特別措置法が制定された。

兵庫県北播磨地域、とくに西脇市には多くの空き家がある。幹線道路を一つ奥に入ると古い長屋や空き家が密集している地区がある。この法律の施行によりそれらの空き家を取り壊して除却することができるようになる。現在存在する空き家の場所、立地、建物、土地利用などから空き家と地域を再生することを考え、対応策を検討する。

13. 集合住宅の立地動向と地域の役割

集合住宅には、一定の地域内で社会経済的地位と家族状況の同質な世帯が集まりやすい。一戸建てが集まって団地を形成しているのも集合住宅であり、マンションやアパートのような大きな建物に多くの世帯が分かれて入居しているのも集合住宅である。集合住宅の形態は時代によって、地域によって変わってくるものと考えられる。田舎のような土地に余裕のあるところでは一戸建てを構えることができるが、都会のように狭い場所に人が密集しているような地域ではマンションやアパートが多くなる。集合住宅の形態や変遷を人口動態と地域の役割から考える。

14. 公共施設の立地—スポーツを中心に—

加東市は2006(平成18)年に加東郡の社、東条、滝野の3町が合併してできた市である。そのためもあり現在、スポーツ関連だけでも多くの公共施設がある。もし、これらの施設が市の規模からして多過ぎるとすると、計画的に縮小、削減する必要がある。加東市内のスポーツを中心とした公共施設について、地域内の立地、数、規模、提供するサービス内容などを検討し、必要な施設のあり方を考察する。

15. 総合スポーツ施設の利用動向と地域展開

加東市の滝野総合公園には、体育館「スカイピア」と多目的グラウンド、テニスコートがあり、様々なスポーツの施設が整備されている。利用者は老若男女それぞれであり、利用する時間にも違いがある。昼間の時間帯には年配者の利用が多いが、夕方以降になると、若者から中年までいろいろな年代の人が利用する。また、加東市内だけでなく、他市に住んでいる人も多く利用している。隣接する市からもいけば、他府県からの利用者もいる。どの年代が多く利用しているのか、どこの地域から利用しに来ているのか調査する。地域に住む人々のレクリエーション活動と公共のスポーツ施設の地域的展開について考察する。

16. 兵庫県の伝統工芸と地域特性—歴史的地理的考察と今後の課題—

伝統工芸品は、一般的には日常生活の用に供され、手工業により製造される織物、染色品、陶磁器、七宝焼、漆器、木工品、竹工品、金工品、和紙、文具、工芸用具などが含まれる。文化財保護法による美術工芸品として重要文化財・重要有形民俗文化財に指定されているものもある。日本の各都道府県に分布しており、一部の伝統工芸品は経済産業大臣指定伝統的工芸品に指定されているものもある。

兵庫県には多くの伝統産業がある。姫路市の白なめし革細工、多可町の杉原紙、小野市の播州算盤など全国的な工芸品が数々ある。これらのものは現在、私たちの生活にはあまりかわりのないものばかりであるが、工芸品が盛んに作られていた時期には多くの人々の実生活に必要な品々であった。

地域の中に組み込まれている工芸品は、生産のために地域に適した、地域特性を利用したものであると考えられる。兵庫県内に現在ある伝統工芸品について、それぞれが地域の特性を生かして作られているのか、歴史的な背景から地域特性とのつながりを考察する。伝統産業がいつ頃から生産されているのか、伝統産業の立地からどのような地域に流通しているのか調べる。現在ではなくなってしまった伝統産業も存在するので、それらもできるだけ多く探す。

また、現在および、これからの伝統工芸について抱えている問題はどのようなものがあるのかを検討する。まず、後継者不足が考えられる。そのほか、コストパフォーマンスの問題、生産性の問題、原材料の調達問題などがあり、それらの問題の解決策を思案する。

小学校では社会科第5学年で伝統工芸、伝統産業を扱う。また、中学校社会科の歴史的分野では各時代ごとの文化が扱われる。今後予想される小中一貫教育に備えて、小学校、中学校社会科での垂直的な連携を視野に入れた指導案を作成する。

17. けん玉の歴史的経緯と世界的展開—社会・教育・レクリエーション—

けん玉は日本古来の昔遊びと考えられているが、実際は違う。フランスのビル・ボケは16世紀ごろから子どもだけでなく、貴族や上流階級の人々にも広く浸透し、国王アンリ3世も愛用した記録がある。ビル・ボケがけん玉のルーツというのが一般的な説である。

ビル・ボケは江戸時代に日本に入ってきて、当初は酒席での遊びであった。明治時代になり、文部省発行の児童教育解説『童女笏』に「盃及び玉」として紹介されてから子どもの遊びへと変化していった。大正時代に入り、広島県呉市に住む江草濱次氏によって、従来のけん先と皿一つで構成されたものから、けんと鼓をヒントに皿胴を組み合わせた「日月ボール」が作られ、現在のけん玉の形状がほぼ完成した。日月ボールは1919(大正8)年5月14日に実用新案として登録された。

1975(昭和50)年5月5日、けん玉の伝承を目的に、日本けん玉協会が創設された。現在、公益社団法人となった同協会が中心となって、けん玉の活動が展開されている。公平な競技を行うためのけん玉、繊細な技ができるけん玉を求め、次第に形状を変えて、現在の「競技用けん玉」が誕生した。統ルールを制定し、全国どこでも同じルールとけん玉で、級や段位が認定されるようになり、単なる伝統遊戯の一つであったけん玉に、スポーツとしての側面が生まれた。しかし、そのことが原因で全国のけん玉の遊び方が画一化し、各地の伝統的な遊び方が失われてしまったのではないかという指摘もある。21世紀初頭の現在では、競技用けん玉が一般的となったが、民芸品や単純な玩具としてのけん玉も各地に存在する。

2010(平成22)年頃、米国の若者が日本からけん玉を持ち帰り、ヒップホップ系の音楽に合わせて様々な技を披露する様子を動画サイトに投稿した。これがきっかけで KENDAMA が新たなストリートパフォーマンスとして認知されるようになり、海外で急速に認知されるようになった。けん玉はインターネットの動画配信サイト(you tube)に投稿されることにより世界中に広まっていった。

現在、けん玉のメーカーは日本だけでなく、世界中に広がっている。日本で今の形状になったけん玉がアメリカに輸出され、その後現地で製造されるようになったものが現在では、日本に逆輸入されたりする。また、日本のメーカーでも外国の工場に製造して、輸入販売している。兵庫県加西市にあるタミワ玩具株式会社がこの形態をとっており、中国の工場に製造し、日本に輸入して販売している。

けん玉は一般的には遊びの一種として考えられがちだが、現在では様々な場面で使われている。その中で、医療現場や学校などでの活用が注目されている。医療現場では、おもに手首や腕を動かすリハビリや手を使うことによるボケ防止に役立つ。学校では、子ども

たちの遊びの一環として取り入れたり、生活科の授業の中にある昔遊びの場面、社会科の授業の伝統産業の分野で取りあげられる。けん玉を使うと、今までに修得した技の場合、技に集中することで集中力が鍛えられる。新しい技に挑戦すると、成功したときに達成感を得ることができる。

私自身が小学生のとき、教鞭を執る傍ら、けん玉の指導をしている先生がいた。現在、けん玉協会の兵庫県姫路支部長を務めている。その先生がこれまでに行ってきたけん玉指導をインタビューするとともに、けん玉の活動を通して子どもたちが身につけた技術と、けん玉の活動成果を考察する。けん玉を取り入れた授業ないし活動を新たに立案し、実際の学校で活用できるようにする。

表 1. 地理学の研究テーマ（修士論文のテーマ）

番号	題名	立地	交通	地域	学習内容	教育	学校
1	兵庫県北播磨地域の飲食店の立地と選好—交通網と空間的行動の分析—	○	○	○	—	—	—
2	大学生の自動車の利用動向	—	○	○	—	—	○
3	小中一貫教育における社会科の内容構成	—	—	—	○	○	—
4	小学校・中学校の統廃合と小中一貫教育	—	○	○	—	—	○
5	附属小学校・中学校の通学パターンの変遷	—	○	○	—	—	○
6	附属小学校・中学校の通学行動の分析	—	○	○	—	—	○
7	子どもの通学行動と帰宅後の遊び場の選択	—	○	○	—	—	○
8	兵庫県の学校の立地変動	○	—	○	—	—	○
9	兵庫県の学校の立地動向	○	—	○	—	—	○
10	学校と地域の連携・協働—チーム学校の課題—	—	—	○	—	○	○
11	教員の養成・採用・研修を通じた資質能力の向上—教職大学院の蹉跌は活かせるか—	—	—	—	○	○	—
12	兵庫県の空き家の現状と課題	○	○	○	—	—	—
13	集合住宅の立地動向と地域の役割	○	—	○	—	—	—
14	公共施設の立地—スポーツを中心に—	○	—	○	—	○	—
15	総合スポーツ施設の利用動向と地域展開	○	○	○	—	—	—
16	兵庫県の伝統工芸と地域特性—歴史的地理的考察と今後の課題—	○	—	○	○	—	—
17	けん玉の歴史的経緯と世界的展開—社会・教育・レクリエーション—	—	—	○	○	○	—
計		8	8	15	4	5	8

出所：筆者作成

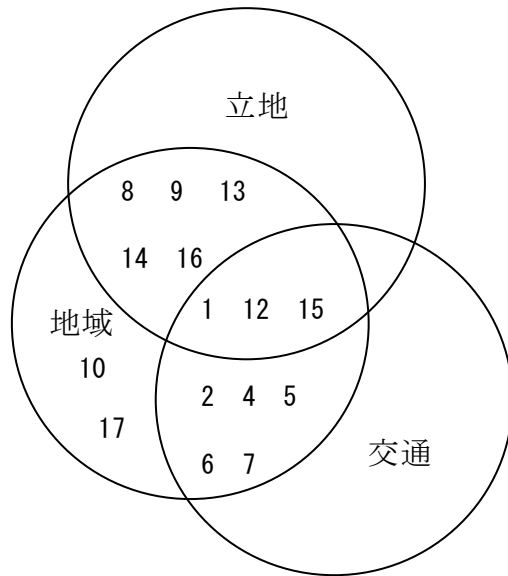


図1. キーワード「立地」「交通」「地域」に関する研究テーマの番号
出所：表1より作成

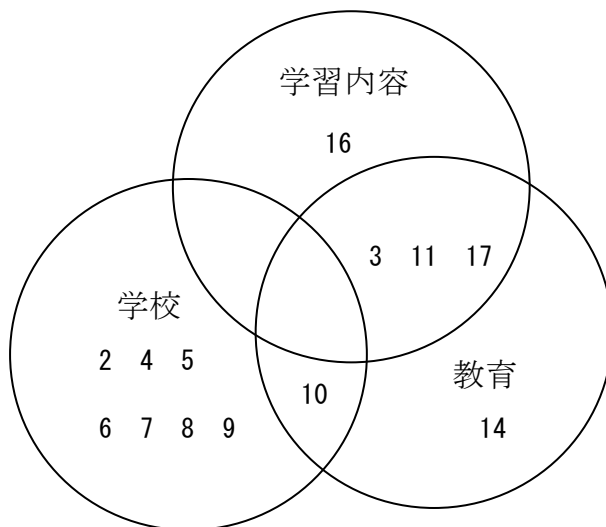


図2. キーワード「学習内容」「教育」「学校」に関する研究テーマの番号
出所：表1より作成

参考文献

- 上赤義人（2007）『小中一貫教育における社会科公民的領域のカリキュラム編成と単元開発』, 社会系教科教育学研究, 第 19 号, 7 P.
- 杉浦芳夫（1989）『地理学講座 第 5 巻 立地と空間的行動』, 古今書院, 207P.
- 日本けん玉協会（2012）『けん玉の技 1 2 3』, 幻冬舎, 125P.
- 南 和樹（2015）『兵庫県北播磨地域の飲食店と学生の動向』, 兵庫教育大学地理学研究室研究報告第 20 号, 4P.
- 矢野博幸（2014）『けん玉で集中力を養う』, 浪速社, 198P.

参考 URL

- 加東市教育委員会 <http://www.city.kato.lg.jp/users/kyouiku/>
- GLOKEN（グロケン）けん玉で世界をつなぐグローバルけん玉ネットワーク
<http://www.gloken.net/jp/>（2016 年 1 月 29 日参照）
- 「けん玉」ウィキペディア（2016 年 1 月 29 日参照）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%91%E3%82%93%E7%8E%89>（2016 年 1 月 29 日参照）
- 公益社団法人日本けん玉協会 <http://kendama.or.jp/>（2016 年 1 月 29 日参照）

A Study on the Subjects of Geography

—Wandering Themes of My Master Thesis—

MINAMI Kazuki

Key Words : location, transportation, region, learning contents, education, school